

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	中村雄二郎の「臨床の知」に関する研究：芸術への展開に向けて
Author(s)	鄭, 西吟
Citation	ぶらくしす , 23 : 119 - 128
Issue Date	2022-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/52237
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052237
Right	
Relation	



中村雄二郎の「臨床の知」に関する研究—芸術への展開に向けて

About Yujiro Nakamura's "*Rinsho no chi (clinical knowledge)*" — Towards its expansion on Art

鄭 西吟（広島大学大学院文学研究科博士課程後期）

Zheng Xiyin (Hiroshima University)

序論

近代以降、科学が発展する中で科学的な物の見方も社会に浸透してきた。しかし、このような見方によって、事象についての表層的な事実理解が先行し、その質や全体性を問う見方は追いやられてしまった。その結果、生態系の破壊など、世界的な問題が頻繁に起こっている。加えて、科学主義の広がりと共に受容される様々な二元論によって、人と人、自己と世界をめぐる豊かで有機的な関係が喪失し、自己疎外、人間不信、自己否定感などの心理的な問題が引き起こされている。

哲学者の中村雄二郎によれば、こうした問題は近代科学の特性に起因するという。近代科学は「普遍性」「論理性」「客観性」という三つの性質を持っている、と中村は指摘した¹。このような明証的基準をもつゆえに、科学は、近代以降、人々に信頼され、説得力を持つ見方として支持されることになる。

しかしながら、近代科学が「説得力」をもって語る現実とは、基本的に機械論的、力学的に選び取られ、整えられたものに過ぎない。したがって、上で見た三つの性質には、この見方に固執するゆえ、それぞれ軽視あるいは無視しているものがある²。つまり、「普遍性」は、場所と時点から事物を抽象して、生命体が生きる様々な固有世界（コスモロジー）を無視した。「論理性」は、一つの原因に対する一つの結果という単線的な因果関係に適しているが、現実はいろいろな側面があり、複雑な相互関係を持っている事物の多義性（そのエッセンスを表徴するシンボリズム）を等閑視した。「客観性」は、主体・客体の分離・断絶を前提にして、両者の交流つまり自分の身体を他人の視線にさらして行う行動あるいは受動的行動（パフォーマンス）を考慮していない³、といえる。

こうした「科学の知」に対し、中村は「科学の知」を反省する「場所」「共通感覚」「情念」などの概念について研究を進め、これらの研究の集大成として、「臨床の知」という新たな知のモデルを提起した。「臨床の知」とは、中村によれば、「個々の場所や時間のなかで、対

象の多義性を十分考慮に入れながら、それとの交流の中で事実を捉える方法」に基づく知である⁴と定義されている。それゆえ、この新たな知の概念を受け入れようとする人々は、普遍的論理的客観的に事物を捉えるほかに、個別性・感性・多義性を重視する特殊的直観的主観的な知に目を向けることも必要になるのである。

以上のような背景を踏まえ、本論文の柱は、「臨床の知」の構造を描出し、その今日的意義を提案することであり、これに加えて、もう一つの柱は、その伝達方法として「芸術」に注目することにある。

中村は主著『共通感覚論』(1979年)において、物事を全体的に把握する人間として、芸術家の存在が重要な意味を持っている⁵と語る。たとえば、絵画を描く場合、芸術家は優れた技法や豊かな想像力を使って、感性に浸された自我を色彩や図形の組み合わせの内に描き込む。その営みを通じて、絵画作品は普遍世界に即応しつつ看取する芸術家の感情・感性・イメージーションを体現し、知を顕在化させていく。この意味で、芸術は、「臨床の知」を内的に実現する一つのホリスティックなアプローチといえる。加えて、鑑賞者が芸術作品と対面する際にも、「臨床の知」の捉え方に類似する鑑賞のプロセスが現れるし、さらに、芸術史の視点から見れば、近代芸術の問題性とその克服に向けた芸術の革新プロセスに「臨床の知」の誕生過程との類似性が見られる。

このような「臨床の知」と芸術の類似性に基づき、「臨床の知」を内面化する方法の一つとして、我々の身近な芸術という営みを解明することが有効であると考えられ、中村の「臨床の知」を芸術の内に再構成することによってその現代的意義を浮き彫りにすることが期待できる。このことをふまえ、本論では、「科学の知」が引き起こす諸問題を芸術活動によって克服する手立てをも追求する。とりわけ、中村が、多くの諸問題は「子ども」をめぐる問題群に収斂している⁶、と示唆するように、本論文では芸術を通した子どもの治療教育の方途を考究することにした。こうした中村の「臨床の知」を芸術やその療育的観点で再読する応用倫理的試みは、本論文の独創的な視点になる。

以上が本論文の問題意識や研究意義である。次に、本論文の研究目的と章構成およびその内容について具体的に説明する。本論文は「臨床の知」の内的構造と現実への応用を考究する一つの試みとして、「臨床の知」の構成原理を究明した上、この概念と芸術との類似性に注目し、芸術的実践が有する治療的役割を介して、「臨床の知」の現代的意義を描出することを目的とする。そのため、本論文は「臨床の知」の理論、芸術の原理、「臨床の知」の展開としての芸術、の三部によって構成され、それぞれ次の内容で展開されている。

1 「臨床の知」の理論

第一部「臨床の知」の理論においては、まず中村の『臨床の知とは何か』(1992年)を軸に、「臨床の知」と「臨床医学」、「臨床の知」と科学への比較考察によって、「臨床の知」の全体像と意義を明らかにする。

現代では医学における「臨床」は、「ベッドサイトにおいて」、「医療現場において」とい

う場合、病気の部位に治療が限定されている。そこでは中村が提唱する感情性や交流性という人間存在全体への洞察が欠如した。「臨床の知」と医学の「臨床」の関連性を探るために、我々は古代ギリシアのヒポクラテスの医学にまで遡り、本来の「臨床」という概念の意味を考察することにする。ヒポクラテスの医学において、医術は病気だけを治療する術ではなく、病を持つ人を治療する術のことを意味する⁷。そのため、当時の治療にとって、もっとも重要なのは、治療現場に臨み、局部的に病気を診察するのではなく、病を持つ人を全体として診察することにあった。その際に、感情的交流が不可欠な要素として要求される。このようなヒポクラテスの医学における「臨床」こそが、中村が提唱する「臨床の知」の起源といえる。

中村は「科学の知」の弊害を克服するために、この「臨床の知」を提示したが、この中村の「臨床の知」の思想に対しては、科学を支持する研究者癸生川によって反論もなされている。しかし、ここで注意しなければならないのは、「臨床の知」は科学そのものを反対するものではなく、普遍性・論理性・客観性ばかりを重視する科学的見方への警鐘と、その克服の枠組みとして示されたものである。科学研究にとって科学的見方が必要であるが、科学的見方で現実生活のあらゆる物事を捉えれば、生き生きとした生活世界の全貌を把握できなくなる。その意味では、中村の「臨床の知」は科学的見方が自身の射程を超えて社会の隅々まで介入・浸透している現代において、その弊害やギャップを埋める意味で重大な意義を持っているのである。

それゆえ、本論文では、この今日的な意義をもつ「知」の概念の内容を明らかにするために、次に中村の『場所（トポス）』（1989年）、『共通感覚論』『現代情念論』（1962年）に基づき、「臨床の知」の三要素である「場所」「共通感覚」「情念」の意味を検討することによって、「臨床の知」の理論構造を具体的に描き出す。

まず、「場所」は、一般に「地点・スポット」、すなわち物理的空間として語られている。しかし、中村の言う「場所」はそうした単なる物理空間としての場所ではなく、古代のトポス論に由来する「存在の深みを象徴するような場所」を意味する。結論でいえば、中村の考える「場所」は人間の本質とつながり、その存在や思考や感受性を支える根底をなしていると理解すべきである。この「場所」をベースに、次にあげる「共通感覚」と「情念」を併せもつものとして人間の存在が語られる。

そこで言われる「共通感覚」とは、視覚、聴覚、嗅覚、味覚などの「特殊感覚」に加え、触覚に代表される体性感覚を仲立ちとし、自己の外へと向けられた意識世界と内に広がる無意識世界とを総合する統合感覚である。我々はこの共通感覚（あるいは体性感覚的統合）によって、世界を感じ取り、さらに他人や自然と共感し、一体化することができる。

最後に中村が重視する「情念」の視点を整理してみる。現代社会において、「情念」は一般に衝動的、非合理的なものとして軽視され、知の要素から排除される傾向がある。「情念（感性）」が排除されたことによって、理性は独走し、「科学の知」のような、普遍領域に届かない人間の推論にのみ依拠した知が絶対視されるようになった。しかし、中村は、社会が

いかに合理化されたとしても、依然として「情念」は人間にとって、最終的には回避しえぬ問題として残りつづける⁸、と主張する。そして、その非合理的な感性と惰性化された合理的な理性をつなぐ重要な力を持つものとして、中村は「想像力」を挙げた。それは事物の質と輪郭とを同時に正しく把握できる無意識下での働く力である。しかも、この「想像力」は、固定化したイメージを解体し、そうしたイメージのもとで作られた秩序から人々を解放することができる。こうした「想像力」の働きの結果、科学によって抑制された感性が覚醒し、豊かな感情生活が回復し、惰性化された理性の更新がなされることが期待できる。

まとめると、中村による「臨床の知」は、「科学の知」の弊害を克服する、具体的な生に根ざした知として提案された。それは、存在の深みから生命を語る「場所」を見据え、意識と無意識をつなぐ統合感覚としての「共通感覚」や、無意識下の想像力によって心の機能を活性化させる「情念」を拠り所とするものではある。

環境問題が益々深刻し、人間関係が希薄化している現代において、「臨床の知」の持つ価値は、より重視されるべきである。そして、そこで次なる課題として、この期待される「臨床の知」をどのように我々の中に組み込み、内面化していくのかが現代の問題として起こってくる。この問題を考える際に、筆者は芸術と「臨床の知」の類似性に目を向けた。そのため、第二部では芸術という営みを解明することによって、「臨床の知」の意義を再確認し、「臨床の知」の実践的可能性を引き出すことをめざす。

2 芸術の原理

中村の「臨床の知」と芸術との関係を解明するため、一般的な芸術論との比較考察を行う必要があり、まず芸術の創作側と鑑賞側の両方面から芸術作用の内実を探り、そうした芸術作用と「臨床の知」との関連性について論及してみたい。

古代ギリシアでは「芸術は模倣の技術である」という命題がある。この命題は独創性を重んじる現代の一般的芸術観と相反しているので、そこから、「模倣」とは何かという重要な問題が出てくる。美学者竹内敏雄はアリストテレスの芸術理論を取り上げ、「自然形象の模倣」、「精神生活の模倣」と「理念的存在の模倣」という三つの意味において「模倣」を重層的に解釈した⁹。しかし、このようなアリストテレスの模倣論は、芸術を普遍的世界に通じるものとして認めたことにおいて、重要な意味を持つが、理念や理想を求める際に、合理性を求めるあまり、芸術主体の内的自我から発する個性を排除した点は欠陥視された。

本論文では理想とする真の芸術は合理的形式に偏したものではなく、恣意的主観に委ねるものでもない。真の芸術は「ロゴスとパトスの総合統一」であるという中村の立場を支持する。しかし、このような芸術モデルはアリストテレスの理論においては、架橋できない。それに対して、筆者は本論文の第一部で紹介した中村論における「臨床の知」を理論化する「体性感覚的統合」と「理性と感性の接点としての想像力」（つまり無意識作用における想像力）という見方を取り上げ、中村論に近い原理を持つ美学研究者の上村博の考えを補強のための理論として組み込むことで、真の芸術の意義を体系づけてみる。

芸術家は芸術創作に際して、「体性感覚的統合」を行う。つまり、外部感覚である視覚と身体感覚である目の筋肉感覚の統合を用い、模倣対象を偏りなく全面的を見ると同時に、間接的に触り、無意識的想像力によって対象の質と輪郭を同時に正しく把握し表現する。このような芸術では、ロゴスの的に像の質が正確に把握されていると同時に、創作する際の芸術家自身の内面に起こるパトスもまた適切に表象されていく。そして、この内面に生じる心の表象はさらに創作の「指導的動機」として、形成しつつある芸術作品と交互作用してともに変化を起こし完成へと向かうのである。こうして、無意識的想像力を介した「ロゴスとパトスの総合統一」という真の芸術の形が現れ、このような芸術作品はまさに中村の説く「臨床の知」の顕在化したものといえる。

そして、真の芸術を鑑賞する際にも、「臨床の知」の捉え方に一致するプロセスが現れてくる。このプロセスを本論では、身体による演技的芸術鑑賞と称する。この見方では、鑑賞者は、作品から受動的刺激を受け、身体全体の感覚を全面的に働かせ、能動的に追体験すること（身体的演技）によって作品の構造を自己の内に再構成する。こうして鑑賞者は作者の独自の世界に通じることができ、さらに真実在としての普遍的世界にも繋がっていく。このような鑑賞プロセスによって、鑑賞者は喜びやカタルシスを体験することができる。

次に、芸術の発展史に目を向け、美術史研究において指摘される遠近法をめぐる近代芸術の問題性とその克服に向けた芸術革新プロセスを考察する。そのプロセスと「臨床の知」の誕生過程との類似性は「臨床の知」による「科学の知」の克服の可能性を我々に提示する。

「遠近法」、特にルネサンス初期の「線遠近法」は空間・世界を客観的に正しく見たいという欲望から生まれた図法であり、一時的に隆盛を誇った。しかし、その後、政権交替や新大陸の発見による世界観の転覆を背景に、その図法自身の極端な合理性や局限性によって、次第に衰微・崩壊していく。ルネサンス以降の芸術は、主観主義的な要素が入るようになり、そして、最後に20世紀初頭のピカソによって創始されたキュビズムに至った¹⁰。キュビズムは一見分かりにくい芸術表現であるが、この種の芸術表現は過去の既成規則を大胆に破壊するという革新的な意義を持つ一方、その多視点的表現手法は感覚的知覚対象を全面的本質的に捉える態度を基本としているので、「臨床の知」と同様に、現代の私たちのものの見方に貴重な示唆を与える。つまり、キュビズムは芸術家の主観主義絵画の一つの重要な芸術様式であるが、その主観には本質的な客観的現実が潜んでいる。その芸術様式において、「臨床の知」が求める内在的現実と外在的現実の統一が実現していることが見て取れるのである。

以上のように、本論の第二部では理論面と歴史面から芸術と「臨床の知」の類似性を論証した。真の芸術は「ロゴスとパトスの統一」であり、「臨床の知」の顕在化したものである。さらに、このような「臨床の知」の顕在化として芸術の実践的作用を探求する際、科学的な知のアプローチから漏れる子どもの臨床場面における芸術を通じた「治療教育」が有効な見方を示唆してくれる。

そのため、第三部では、中村自身の芸術論（「演劇的知」）の視点から、再び芸術の働きを

「臨床の知」の内に位置づけることを試みて、中村が治療教育の専門家である川手鷹彦と対談し、共に著した『心の傷を担う子どもたち一次代への治療教育と芸術論』（2000年）をもとに、「臨床の知」と芸術と療育（自己のリカバリー）とをつなぐ応用倫理学（教育倫理学）の可能性、つまり「臨床の知」の教育における現代的意義について言及する。

3 「臨床の知」の展開としての芸術

我々現代人にとって、子どもは未熟の人間であり、そして、「教育」とは未熟の子どもを成熟の大人へと発達させることである。しかし、これはあくまでも「大人の秩序」によって見た子ども観である。このような偏った子ども観に対して、中村は「子どもは神に近い存在である」という古来の観点を支持し、子どもを「荒ぶる神」として認識する¹¹。具体的に言えば、子どもは本質的に、純真でありながら時には乱暴に行動して我々大人の基準・秩序に反するという両義性を持っている。それゆえ、子どもは、我々に恩恵を与えると同時に災害をもたらす自然と重ね見られ、根源的自然を体現している存在とされたわけである。そのため、根源的自然としての子どもに向き合う時、我々は大人の基準を用いて彼らを束縛するのではなく、むしろ彼らを一つの独自の宇宙として認識し、そのまま捉えるべきなのである。

このような「子ども」の概念は中村自身の芸術論（「演劇的知」）を導き出したバリ文化における「魔女ランダ」の本質と類似していると言える。魔女ランダは恐怖的存在であると同時に、その恐ろしい力を使ってバリ島の人々を守り、我々に意味豊かな深層的知（演劇的知）を提示した。それに対応するように、中村の説く「神としての子供」もまた、荒々しく残酷な存在であると同時に純真で我々に恩恵を与えてくれる。そこに、子どもと大人を包む独自の宇宙観が成り立ち、その宇宙観から、子どもとの接し方や、新たな教育の可能性を見出せる。そして、その可能性の実践モデルは生きづらさや障害を持つ子どもを、従来の枠組みを脱し、「パトス的人間」「痛みを持つ人間」として理解する傾向を持つ「治療教育」にある。

中村・川手論によれば、真の「治療教育」とは、助ける側と助けられる側の共同成長である¹²。その共同成長は「パトス・痛みの共有」なしに成立しないが、中村によれば、それに先立ち、「パトス・痛みの共有」の実現には「開かれた感受性」が不可欠であるとされる¹³。そして、「開かれた感受性」がどこから獲得できるのかといえば、芸術に接することによって、持続に訓練すれば修得できると考えられている。芸術の治療教育における役割を具体的に言えば、次の二点がある。

まず、第二部で考察したように、子どもは創作的芸術行為において、芸術作品を通して、大宇宙に共振する自分を身体的に表現するが、または鑑賞的芸術行為において、作者の創作体験を身体的に追体験し、作者・作品を通して大宇宙との共振を実現できる。治療教育の場合、教育者が子どもと創作や鑑賞の芸術行為を共に体験することによって、大宇宙や子どもとの「互いのコスモロジカルな共振」ができ、「痛みの共有」が可能となる。こうして、普遍や人と人との呼応するこのような芸術行為の積み重ねによって、子どもは自らが背負う痛みを知り、自己を発見することに至るのである。

また、「治療教育」の対象となる子どもたち自身も、そもそも常識的な教育の枠組みに当てはまらない子どもたちであるから、彼らのための「治療教育」は、均質的な価値観に基づく訓練的教育であってはならない。かえって、一般的な教育の基準を打ち破り、彼らの一人一人の内に潜む能力を呼び起こす教育こそ、適切なものである。そして、芸術はまさに既成の規則や世間的権威を打ち破る力を持つから、治療教育の現場において、芸術行為によって、子どもたちにすべての「障害」を乗り越える道が開かれるのである。

最後に、本論文は芸術の教育的効果が「治療教育」の範囲を超えて、一般的な教育の場にも適用可能であるということを示唆してみたい。前文で紹介したように、子どもは我々のような近代の知に制約・支配されている大人と根本的に違い、根源的自然を体現する一つの独自の宇宙である。そのため、教育の本当の目的はこのような子どもたちの本性を尊重し、そこに潜む根源的自然を体現する能力を引き出すことにある。ところが、現実の教育の場面では、荒ぶる神としての子どもは不成熟・不完全な存在であるように考えられ、現実社会に適応させるように、大人の理論に従って子どもの本性を変え、子どもを大人に同化させることが一般的な教育の目標になった。こうした現在の教育はまさに子どもの開かれた感受性を閉塞させる方向に進んでいると言え、教育の本来の目標との間に大きなギャップが存在する。このギャップを埋めるためには、学校教育に「臨床の知」の一つとしての芸術を取り入れることが必要となり、芸術によって、抑圧やゆがめられた心身を開放し、自己の内奥から貫かれた「開かれた感受性」を回復させ、根源的自然としての本性を引き出すことが可能となる。この意味で、今日、我々は芸術を介した「臨床の知」の応用倫理学的実践の可能性を治療教育、さらには広く教育に波及すべきものとする。

* 本稿は筆者の博士学位請求論文「中村雄二郎の「臨床の知」に関する研究—芸術への展開に向けて」の概要である。

注

- 1 中村雄二郎、『臨床の知とは何か』、岩波新書、1992年、6-7頁参照
- 2 同上書、7-8頁参照
- 3 同上書、7-9頁参照
- 4 同上書、9頁
- 5 中村雄二郎、『中村雄二郎著作集 V 共通感覚』、岩波書店 1993年、57頁参照
- 6 中村雄二郎『中村雄二郎著作集 VI パトス論』岩波書店、1993年、133、175頁参照
- 7 中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書、1992年、144-145頁参照
- 8 中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書 1992年、3頁参照
- 9 竹内敏雄『アリストテレスの芸術理論』弘文堂、1959年、215-340頁参照
- 10 佐藤忠良・中村雄二郎・小山清男・若桑みどり・中原祐介・神吉敬三『遠近法の世界—人間の眼は空間をどうとらえてきたか』、平凡社、1992年、60-317頁参照
- 11 中村雄二郎『中村雄二郎著作集 IX 術語集・問題群』岩波書店、1993年、70-73頁参照

¹² 中村雄二郎・川手鷹彦『心の傷を担う子どもたち—次代への治療教育と芸術論』誠信書房、2000年、404頁参照

¹³ 同上書、41頁参照

引用・参考文献

本稿の引用・参考文献を著書、論文、インターネット資料に分類し、著者の50音順に記す。

著書

アリストテレス『詩学』（松本仁助、岡道男訳）世界思想社、1985年

アリストテレス『形而上学』（岩崎勉訳）講談社、1994年

上村博『身体と芸術』昭和堂、1998年

大塚信一『哲学者・中村雄二郎の仕事—<道化的モラリスト>の生き方と冒険』トランスビュー、2008年

坂部恵『仮面の解釈学』東京大学出版社、1976年

佐久間鼎『日本語の言語理論』恒星者厚生閣、1959年

佐藤忠良・中村雄二郎・小山清男・若桑みどり・中原祐介・神吉敬三『遠近法の世界史—人間の眼は空間をどうとらえてきたか』平凡社、1992年

E・サピア、B・L・ウォーフ『文化人類学と言語学』（池上嘉彦訳）弘文堂、1995年

サルトル『想像力の問題：想像力の現象学的心理学』（平井啓之訳）、人文書院、1955年

竹内敏雄『アリストテレスの芸術理論』弘文堂、1959年

デカルト『情念論』（谷川多佳子訳）岩波書店、2008年

デカルト『方法序説』（谷川多佳子訳）岩波書店、1997年

時枝誠記『国語学原論 [正篇] 上』岩波書店、2007年、原典『国語学原論—言語過程の成立とその展開』岩波書店、1941年

時枝誠記『国語学原論 [正篇] 下』岩波書店、2007年、原典『国語学原論—言語過程の成立とその展開』岩波書店、1941年

時枝誠記『国語学原論 [続篇]』岩波書店、2008年、原典『国語学原論—言語過程の成立とその展開 [続篇]』岩波書店、1955年

戸坂潤『日本イデオロギー論』岩波書店、1997年

中村雄二郎『場所（トポス）』弘文堂、1989年

中村雄二郎『中村雄二郎著作集 I 情念論』岩波書店、1993年、
原典『感性の覚醒』岩波書店、1975年
中村雄二郎『共振する世界』青土社、1991年
中村雄二郎『中村雄二郎著作集 I 情念論』岩波書店、1993年、原典『現代情念論』、勁草書
房、1962年
中村雄二郎『中村雄二郎著作集 V 共通感覚』岩波書店、1993年、原典『共通感覚論—知の
組みかえのために』岩波書店、1979年
中村雄二郎『中村雄二郎著作集 VI パトス論』岩波書店、1993年、原典『魔女ランダ考—演
劇的知とはなにか』岩波書店、1983年
中村雄二郎『中村雄二郎著作集 IX 術語集・問題群』岩波書店、1993年、原典『術語集—気
になることば』岩波新書、1984年
中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書、参考版2017年、初版1992年
中村雄二郎・川手鷹彦『心の傷を担う子どもたち—次代への治療教育と芸術論』誠信書房、
2000年
西田幾多郎『場所・私と汝 他六篇：西田幾多郎哲学論集1』（上田閑照編）、1987年
ハインリヒ・ヴェルフリン『美術史の基礎概念：近世美術における様式発展の問題』（海津
忠雄訳）慶應義塾大学出版会、2000年
本田和子『異文化としての子ども』紀伊國屋書店、1982年
G・バークリ『視覚新論』（下條信輔、植村恒一郎、一ノ瀬正樹訳）勁草書房、1990年
フーコー『狂気の歴史：古典主義時代における』新潮社、1975年
フーコー『臨床医学の誕生』（神谷美恵子訳）みすず書房、1969年
フロイト『精神分析入門 [上]』（安田徳太郎、安田一郎訳）角川学芸出版、2012年
フロイト『精神分析入門 [下]』（安田徳太郎、安田一郎訳）角川学芸出版、2012年
ルソー『エミール [上]』（今野一雄訳）岩波書店、2007年
ルソー『エミール [中]』（今野一雄訳）岩波書店、2007年
ルソー『エミール [下]』（今野一雄訳）岩波書店、2007年
ルソー『社会契約論』（作田啓一訳）白水社、2010年
ルソー『人間不平等起源論』（中山元訳）光文社、2008年
レオン・バッティスタ・アルベルティ『絵画論』改訂新版（三輪福松訳）中央公論美術出版
社、2011年

柳田国男『こども風土記/母の手毬歌』岩波書店、1976年

論文

岡智之「場所の論理から見た日本語の論理」『日本認知言語学会論文集』第11巻、13-16頁、2011年

岡田猛・縣拓充「展望—芸術表現の創造と鑑賞、およびその学びの支援」『教育心理学年報』第59集、144-169頁、2020年

癸生川武次「＜中村雄二郎著—臨床の知とは何か＞に於ける物理学批判について」『信州大学教育学部紀要』No119、141-146頁、2006年

小山清男「＜魚の骨＞的構成—ドゥッチオの絵画空間について」『図学研究』45号、17-23頁、1988年

滝野功久「＜臨床の知＞から教育を見直す」『京都橘大学研究紀要』39号、267-293頁、2013年

富永真琴「臨床医学におけるサイエンスとアート」『山形医学』27(1)、1-10頁、2009年
西園芳信「J. デューイの芸術論にみる芸術の分類についての考え方」、鳴門教育大学研究紀要第27巻、311-318頁、2012年

インターネット資料

石村実「絵画の触覚性と中村雄二郎『共通感覚論』」、2019年、閲覧日：2022年03月05日
<https://blog.ap.teacup.com/applet/tairanahukami/101/trackback>

石村実「中村雄二郎『魔女ランダ考と市川浩『＜身＞の構造』」、2019年、閲覧日：2022年03月05日
<https://blog.ap.teacup.com/tairanahukami/102.html>

長田典子「なぜ音や文字に色が見えるのか？フシギ能力、共感覚とは何か」、2012年、閲覧日：2022年03月05日
<https://imidas.jp/jijikaitai/1-40-146-12-02-g434>